

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Between the Two Worlds in Chinogwi kut

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重松, 真由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004498

正 誤 表

頁	行	誤	正
258	9	十二巨星	十二巨里
259	5	渡在中	滯在中
259	17	附祭	祔祭
260	13	parigongju	parikongju
261	脚注	附祭	祔祭
262	表 1, 項番 14	parigongju	parikongju
263	11	夫妻	妻
266	28	十二巨星	十二巨里
268	16	p'alja	p'alja
269	3	万明来	万明米
271	5	仏事巨理	仏事巨里
272	9	両親親族相互	両親相互
278	4	parigongju	parikongju
278	6	五色汗彩	五色汗衫
278	8	上に巫して杖鼓を	上に杖鼓を
278	11	parigongju	parikongju
278	15	線香 1 鉢	線香 1 本
279	5	puljŏn-don,	puljŏn-ton,
279	23	十王橋	十王橋
279	23	siwangdari,	siwangtari,
280	5	siuni	sinui
280	6	祭祀	祭次
280	8	twitcchŏn	twitchŏn
282	11	とりままく	とりまく

チノギ賽神における祖上と神霊

—韓国京畿道楊州郡K洞の事例—

重 松 真由美*

Between the Two Worlds in *Chinogwi-kut*

Mayumi SHIGEMATSU

Shamanism in the greater Korean culture area has a long and complex history. However, there is little historical literature on the content of Korean shamanism, which appears to be suggestive of the nature of the subject. This article provides data on *kut*, the major ritual of Korean shamans, and describes one of several *kut* that I observed during the course of seventeen months field research in a village of Kyōnggi Province.

Through a socially defined process of feeding and giving pleasure to spirits and ancestors, the rituals of *kut* engage them in a temporary alliance with the living villagers.

The *chinogwi-kut* described here was held on the death of Mr. S on December 7, 1979. It lasted sixteen hours, beginning at five in the evening, and was performed by *mansin* (the polite term of address for a shaman in Kyōnggi Province). The ritual is a complex interplay between a client (Mrs. S), her family and relatives, villagers, *mansin*, and ancestors and spirits.

Analysis of *kut* is useful in elucidating the Korean view of death, the interplay between the worlds of the living and the dead, and the role of ancestors and spirits.

- | | |
|-------------|---------|
| I. はじめに | 4. 神将巨里 |
| II. 十二祭次の実例 | 5. 大監巨里 |
| 1. 行厨退散 | 6. 仏事巨里 |
| 2. 不浄巨里 | 7. 舞 監 |
| 3. 祖上巨里 | 8. 上山巨里 |

* 国立民族学博物館第1研究部

- | | |
|-----------|----------|
| 9. 成造巨里 | 14. 鉢里公主 |
| 10. 基大監乞粒 | 15. 十王橋 |
| 11. 軍雄巨里 | 16. 後 餞 |
| 12. 城隍巨里 | Ⅲ. おわりに |
| 13. 使者娛遊 | |

I. はじめに

本稿の目的は、1979年12月7日・8日の2日間にわたり韓国京畿道楊州郡K洞S宅においておこなわれたチノギ賽神¹⁾(死霊祭)を記述し、巫、依頼者とその家族および親族、祖上(chosang, 조상)²⁾、神霊のそれら相互の関係として捉えられる賽神(kut, 哭)の事例を提出することにある。

一般に「賽神は十二巨里(yöltu-göri, 열두거리: 十二祭次)」と言われるが、実際におこなわれる賽神の祭次が12となることはほとんどない。この十二巨里とは、12という数字が干支における基本数であり、それが完全数とされたことによるものとおもわれる。現実には、賽神ごとに祭次は異なっており、その目的によって部分的に強調されたり少しずつ変えられていることが多く、全体として同じ賽神を再現することはできない一回限りのものである。

ところが、賽神の各祭次において、一群の神霊を招致(maji, 맞이)し娛神(nori, 놀이)させて災いを解く(p'uri, 풀이)ことはほとんど一定してみられ、十二祭次を

1) Chinogwi(진오귀, 지노귀)あるいはchinogi(진오기)と発音され、ソウル・京畿道地方において死者の霊魂をあの世(chösung, 저승)に送る賽神をさしてこのように称す。楊州地方の万神女(72歳、1979年現在)によれば、死後3日以前におこなう死霊祭をとくにChin-chinogwi-kut(진진오귀哭)と称している。そして、chinogwi-kut(진오귀哭)とは49日以内におこなう死霊祭をさし、七七齋(ch'ilch'iljae, 칠칠재: 死後49日目におこなわれる忌祭)と共におこなわれるものであるという。また、1930年代には、死後葬礼をおこなう前に死者を七星板スリモクに載せたままおこなう場合と死後時を経ておこなう場合があり、京城地方ではこれを板頭チノキおよびチンチノキ、海州地方ではチノキ・マルノキと称していたことが記されている【秋葉 1938: 186】。慶尚道地方では死霊祭をogu-kut(오귀哭)と称するが、このogwi, ogi, oguとは、死者の霊魂をあの世へ送ることを意味するものとおもわれる。ogwiにはchin(진: 湿った)-ogwiとmarün(마른: 乾いた)-ogwiがあるようであり、chinogwi-kutとは死後まもなく日を重ねないうち(万神C女の言にあるように遅くとも49日以内)におこなわれる死霊祭をさしていたといえよう。また、chinogi(진오기)に関しては、chin(진)とは不吉な事を意味し、ogi(오기)とはok(옥)が2音節になったと考えられ獄(ok, 옥: 地獄)であって、chinogiとは不吉な地獄という意味ではないかとしている【金 1966: 42-43】。なお、賽神とは巫覡による歌舞降神・除災招福の儀礼をいう。

2) 「祖上」の概念は、日本語の「祖先」「先祖」とは必ずしも一致せず、同姓集団をなす家々の祖上であり、「祖先」よりは広い範囲にわたっている。また、賽神においては、家の守護神や地縁的な守護神をも祖上と呼ぶので、本稿では原語のまま表わしておく。

遂行することによって除災招福という賽神の目的が成就される。「招致」・「娛神」・「解き」が何度も繰り返されることこそ歌舞降神儀礼である賽神の特徴といえよう。

巫俗に関する史的文献には巫俗そのものの側から書かれたものはほとんどないが、そのことが何よりも巫俗の担って来た宗教的・社会的性格を物語っているようにおもわれる。史書・随筆といった文献に散見する記述によれば、歌舞を降神技法とする巫についてはすでに『朱子語類』や『漢書釈義』にみえ【柳 1971: 42】、また、高麗時代の巫儀はほとんど現代の賽神と同じ構造物をもつことが指摘されている【崔 1967: 6-29】。1885年、蘭谷によって著わされ描かれたとみられる『巫党来歴』と題する写本と13枚の絵図（楽工の図と巫祭の十二巨星の絵図）は³⁾、巫俗そのものを対象として記した貴重な資料であり、李朝末の民衆の間における巫俗の盛行と当時の実学の気風を示す結晶といえよう。また、十二祭次についての記録は、1937、1938年、赤松智城・秋葉隆『朝鮮巫俗の研究』上・下巻にみられ、1967年、張籌根・崔吉城『京畿道地域巫俗』（楊州郡巫女趙英子篇）は巫俗を全般的に詳述したものとして資料的価値が高い。

巫による死霊祭は、チノギ賽神（京畿道・ソウル地方）・娛鬼賽神（ogu-kut, 오구투: 慶尚道）・洗祭（ssitkim-kut, 씻김투: 全羅道）・橋祭（tari-kut, 다리투: 北部地方）というように、地方ごとに名称を別にしており巫祭も相異なる。

ここに掲げるチノギ賽神は、歌舞を降神技法とする万神（mansin, 만신: 京畿道・ソウル地方での巫女に対する尊称）による、死という災いを祓い招福を祈願するための儀礼である。この場合、十二祭次の各名称はこの賽神を遂行した4名の万神の各者によって相異していたが、それらの祭次は本来数祭次にわたるのを短縮して一祭次としておこなうからであるという。したがって、本稿では熟巫である大万神（k'ün-mansin, 큰만신）が認識している祭次名を示す。そして、祭次を続ける4名の万神の交替と雑鬼への施食に注視しながら、万神、神託（kongsu, 공수: 神霊の応答）を受ける依頼者とその長男の嫁（k'ün-myönuri, 큰며누리）、同婿（tongsó, 동서: 兄弟の妻たち相互の呼称）や sinui（시누이: 夫の姉妹の呼称）たち、祖上および神霊のそれら相互の関係としての十二祭次を辿り記述することとした。

従来諸研究においては、巫覡の側から捉えた歌舞降神の巫儀を賽神と見做す一般的傾向がみられる。ところが、実際におこなわれている賽神は、前述のような相互関係として存在しているのである。本稿で、事例を掲げて相互関係としての賽神を記述することにしたのは、何故賽神がおこなわれるのか、賽神はいかなる機能をもっている

3) 『巫党来歴』に関する詳細な研究として泉の研究 [1967: 55-74] がある。

るのかについて韓国社会の脈絡の中で捉え、韓民族の文化・宗教的世界観を考察しようとする際、とくに賽神を成立させている相互関係が重要な手がかりを提供するものとおもわれるからである。

本稿に提出する資料は、筆者が、昭和53年度文部省アジア諸国派遣留学生として韓国に渡在中、京畿道楊州郡K洞の方々と共に過ごしフィールド研究をおこなう（1978年11月～1980年4月）過程で遭遇した賽神の一つであり、教えていただいたK洞の方々ならびに当地を訪れた万神の方々の暖かいご理解とご親切に依っている。ここに深く感謝し、依頼者の夫S氏の冥福を祈る。

Ⅱ．十二祭次の実例

このチノギ賽神は、1979年9月27日に原因不明の吐血により他界した依頼者の夫を極楽天界（kǔngnak-ch'ōngye, 극락천계）に送り、死の災いを祓い招福を祈願する目的でおこなわれた賽神である。

S宅では三日葬（samiljang, 삼일장：死後三日目に葬式をすること）をおこない、死者の埋葬を終えた日の晩にも同じ万神に依頼して charigōji（차리걸이：棺の置かれていたところを清めることを意味し、死の災いを祓う巫儀をさす）をおこなっている。

12月7日は明け方に附祭（puje, 부제）を⁴⁾すませた後、夕方からこのチノギ賽神がおこなわれることとなった。

K洞ではほとんどの賽神が夜間におこなわれたが、これは一般に神霊や祖霊は夜間に活動するとされていることによるようである。

賽神の当日は、依頼者が中心となって嫁および同婿や sinui 等により甑餅（siruttōk, 시루떡：甑とは素焼の蒸籠を称し、粳米の粉と小豆とを層にして入れて蒸した餅）・白雪餅（paeksōlgi, 백설기：粳米の粉で作った蒸餅）・三色果実 [sam-sekkwasil, 삼색과실：3種類の果物の意で儒教式の祭祀（chesa, 제사）の際に供える棗・栗・柿をさすが、ここでは、りんご・なしなども含めてこのように呼ぶ]・北魚（pugō, 북어：乾明太魚）・豚頭・牛足・酒（sul, 술）・お菜物（namul, 나물：青葉をゆでて作ったお菜）・白米などの供物や接待のための濁酒（makkōlli, 막걸리）と数種のキムチおよび御飯やお汁（kuk, 국）が準備される。この場合には見られなかったが、大門

4) 卒哭 [cholgok, 칠곡：人が死んだ後3カ月目の丁日または亥日におこなわれる祭祀（chesa, 제사：儒教式の祭祀をさす）]の次の日の早朝におこなわれる祭祀を称し、このとき死霊は祖霊のもとに行くと言われている。

(taemun, 대문:家の出入門)に禁縄(kŭmjul, 금줄:注連縄)がはられていることもある。

午後2時頃、大万神が2名の神娘[sinttal, 신딸:万神は降神した後大万神との間に神縁による母娘関係を結ぶことが一般的であり、それぞれ神母(sinŏmŏni, 신어머니), 神娘と呼びあう]ならびに神母を同じくする年下の万神[大万神は妹(tongsaeng, 동생)と呼ぶ]を伴ってS宅を訪れた。4名の万神は、内房(anppang, 안방)に入って巫儀に使う帝釈扇(chesŏk-puch'ae, 제석부채:帝釈とは巫のまつる仏教的色彩の濃い神霊で、子孫の守護神とされている)・帝釈僧帽(chesŏk-kokkal, 제석고깔)・修羅篋(surachong, 수라종:修羅とは争いを好む鬼神とされる)などの扇や扇形のつくりものを白紙で折りながら、十王橋[siwangdari, 시왕다리:死者がこの世(isŭng, 이승)からあの世(chŏsŭng, 저승)へいたる間を橋と見做してこのように称す]に使う麻布(sambe, 삼베:荒い織りの麻布で喪服に用いられ死を象徴するもの)や白木綿布[仏事橋(pulsa-tari, 불사다리)と称し、鉢里公主(parigongju, 마리공주:捨姫)の際に用いたものを麻布と同様に使う]あるいは祖上および死者のためのチマ(裳)・パジ(袴様の下衣)・チョゴリ(上衣)を確認し、さらに位牌(wip'ae, 위패)・位牌敷(wip'ae-pangsŏk, 위패방석)を白紙で切り抜いて準備する。

また、賽神の主な祭場となる大庁[maru, 마루:家の守護神である成造(sŏngju, 성주)の宿所とされている]の奥(西北側)には、万神の指示によって、山神膳(sansin-sang, 산신상:切り分けて高く重ねた飯餅・果物・菓子・白米・酒)・將軍膳(changgun-sang, 장군상:山神膳に準ずる)・仏事膳(pulsa-sang, 불사상:白雪餅・

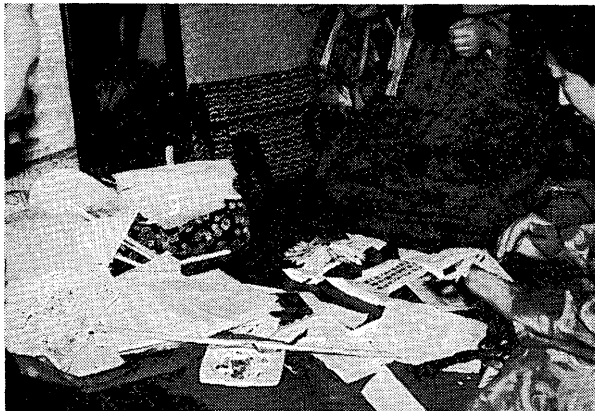


写真1 白紙で折ったり切り抜いたりして、賽神に使う紙のつくりものを作っている万神たち。

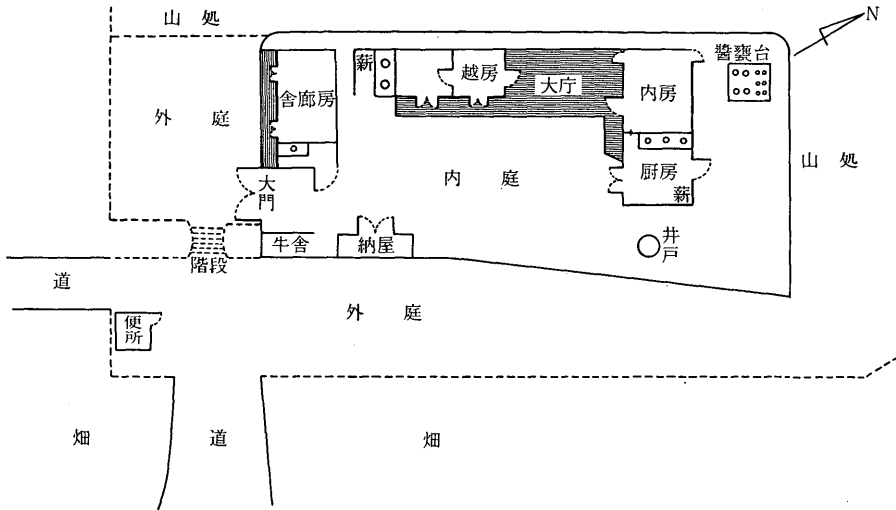


図1 S宅の間取

豆腐・果物・菓子・酒）・祖上膳 (chosang-sang, 조상상：切り分けてお皿に入れた
 甑餅・豆腐・果物・菓子・北魚・白米・酒)・本郷膳 (ponhyang-sang, 본향상：切
 り分けた甑餅・白雪餅・果物・菓子・豆腐・お菜物などを少しずつ供える小さい膳。
 なお、本郷とは本郷木に住む神霊で、依頼者の住んでいる地を守護しているとされる)
 と成造甑 (sǒngju-siru, 성주시루：甑に入ったままの甑餅・果物・菓子・酒)や大監
 甑 (taegam-siru, 대감시루：甑に入ったままの甑餅・濁酒・牛足・豚頭・北魚。な
 お、大監とは多欲な財福の神とされる)などの供物が整えられ、そのうち仏事膳は内
 房に置かれた。また霊座 [yǒngjwa, 영좌：ふつう小祥 (sosang, 소상：死後1年目
 の忌祭)までの1年間 (この場合は70日間に短縮)⁵⁾ 死霊を家の中にかまつるが、その
 祭壇をさす]のあった越房 (kǒnnǒnbang, 건넌방)をはじめとする各部屋および厨
 房 (puók, 부엌), 内庭 (an-madang, 안마당)の醬麴 [changdok, 장독：味噌・醬油
 を醸造・貯蔵する陶製のかめで、日あたりのよいところに作られた醬麴台 (changdok-
 taе, 장독대)の上に並べられている]の上や井戸 (umul, 우물), 納屋 (kwang, 광)・
 牛舎 (woeyangkan, 외양간)・大門および門の外にある便所 (pyǒnsokan, 변소간)
 などの各所に、切り分けた甑餅を少しずつお皿に入れて供えた。

やがて準備が整う頃には日没となり、本郷膳が外庭 (pakkat-madang, 바깥마당)
 に運ばれ、その場にいる人々がすべて門の外に出てしまうと、杖鼓 (changgu, 장

5) 依頼者の家S宅には85歳になる亡き夫の継母があり、いわゆる簡素化を計るうえからも附祭
 をすませた後に霊座をかたづけるところにしたという。



写真2 醬臺台に供える万神と依頼者。

表1 チノギ賽神の十二祭次

	祭 次 名	祭 場
	12月7日 午後5時—8日午前3時	
1	行厨退散 (haengju-mullim, 행주물림)	外庭
2	不浄巨里 (pujōng-kōri, 부정거리)	大庁・内房・越房 (靈座のあった部屋)
3	祖上巨里 (chosang-kōri, 조상거리)	大庁
4	神将巨里 (sinjang-kōri, 신장거리)	大庁・内房・越房
5	大監巨里 (taegam-kōri, 대감거리)	内庭
6	仏事巨里 (pulsā-kōri, 불사거리)	内房・大庁
7	舞 監 (mugam, 무감)	大庁
8	上山巨里 (sangsān-kōri, 상산거리)	大庁
9	成造巨里 (sōngju-kōri, 성주거리)	大庁
10	基大監乞粒 (t'ōdaegam-kōllip, 터대감걸립)	内庭
	12月8日 午前7時—午後1時	
11	軍雄巨里 (kunung-kōri, 구녕거리)	内庭・大庁
12	城隍巨里 (sōnang-kōri, 서낭거리)	外庭
13	使者娛遊 (saja-nori, 사자놀이)	外庭
14	鉢里公主 (parigongju, 바리공주)	外庭
15	十王橋 (siwangdari, 시왕다리)	外庭
16	後 餞 (twitcchōn, 뒗진)	外庭

子)⁶⁾の音と共にいよいよ賽神が始められる。この杖鼓の音によって、近所の人々は賽神が始まったことを知り見物に訪れる。表1には以下に述べる十二祭次の名称と祭場をまとめておいた。

6) 胴のくびれた両面鼓で、坐してこれを前に横たえ左右両面を打つ。ただし、チノギ賽神の鉢里公主の巫歌を語るときは縦にしてその上面のみを打つ。巫楽には不可欠なもので、賽神では常に用いられる打楽器である。changgo (장고) と称す。

1. 行厨退散 (haengju-mullim, 행주물림)

行厨 (haengju, 행주) とは御膳を別のところに移すことを称し、mullim (물림) とは追いはらうことを意味する。すでに外庭には本郷膳が運ばれており、人々はみな門外に出て、杖鼓の音と共に外庭が祭場となる。賽神をおこなう依頼者の家S宅から雑鬼を退散させるための祭次である。

外庭には、本郷膳に甑餅・白雪餅・三色果実・大豆・小豆・豆腐・お菜物・酒3杯・水1杯が供えられ、そばに白米で満たされた枡が置いてある。その白米に、城隍旗 (sōnang-ki, 서낭기)⁷⁾ がさされている。

万神は平服のまま花扇 (kkot-puch'ae, 꽃부채) を手にして巫歌を朗唱し、それを受けて坐巫が杖鼓を打ちながら巫歌をくり返す。このことを万寿受け (mansubaji, 만수받이) といい、その際、賽神をおこなっているS宅の住所、亡き夫とその夫妻である依頼者の姓名・年齢、その子女の名および年齢が次々にくり返されていく。そして、万神は、快子 (k'waeja, 쾌자: 韓軍服の一種) を身につけて杖鼓と鉞籬 (bara, 바라)⁸⁾ により激しい舞いを続け、大神軍雄 (taesin-kunung, 태신군웅: taesin とは巫に宿っているとされる神靈を意味し、kunung とは戦死した武将勇士の靈を称す)・都堂軍雄 (t'odan-kunung, 토단군웅: t'odan とは高く平坦な地を意味する)・上山軍雄 (sangsang-kunung, 상산군웅: 全ての鬼神を退散させ得る強い神靈とされている)・本郷大監 (ponhyang-taegam, 본향대감: 郷土をまもる神靈。なお、大監とは敷地・家・樹木・石などに宿る神靈の尊称)・府君大監 (pugun-taegam, 부군대감: 洞内をまもる神靈)・都堂大監 (t'odan-taegam, 토단대감)・殺靈大監 (salyōng-taegam, 살영대감: 不慮の死を遂げた靈)・水殺大監 (susal-taegam, 수살대감: 水の悪靈を称す)・使臣大監 (sasin-taegam, 사신대감: 王の代理として外国に派遣された使者の靈)・樹林大監 (sup'ul-taegam, 수풀대감)・独脚鬼大監 (tokkaebi-taegam, 도깨비대감: tokkaebi とは妖鬼・化物を意味する)・軍雄大監 (kunung-taegam, 군웅대감)・上山大監 (sangsang-taegam, 상산대감)・男城隍 (nam-sonang, 남서낭)・女城隍 (yo-sōnang, 여서낭)・軍雄祖父 (kunung-harabōj, 군웅할아버지)・軍雄祖母 (kunung-halmōni, 군웅할머니)・本郷祖父 (ponhyang-harabōji, 본향할아버지)・本郷祖母 (ponhyang-halmōni, 본향할머니) などの諸神靈⁹⁾ に賽神をおこなうこと

7) 洞内の三つ辻で、万神によって白紙で作られた旗を称す。

8) 韓楽器の一つでシンバルに似た銅拍子。銅鉞 (chegūm, 제금) とも称す。神靈が降神するときに多く用いられるようである。

9) 諸神靈の名が次々と呼ばれ30分の間続けられたが、15年前には諸神靈に告知するのに2〜3日かけていたという。それらの神靈の中には、遠く崑崙山の山々の山神等も含まれていたという。

が告知されていく。

まず最初に、内堂基主 (anttang-kiju, 안당기주：内堂とは母屋の大庁。大庁の守護神) が降神し、

「ああ、(お金が) ないといって(夫がおこなおうといった賽神を) おこなわずに。私が知らせたにもかかわらず [先に洞内でおこなわれた財数賽神 (chaesu-kut, 재수굿：財運を祈願しておこなわれる賽神) の際の神託をさす]¹⁰⁾、ああ、子女がかわいそうだ」

とくり返し語る。それに対して依頼者は、

「知らなかったからでございます。分らなかったからでございます。それで、今日、このように精誠 (chǒngsǒng, 정성：まごころ。ここでは供物をそなえてチノギ賽神をおこなうことをさす) をこめておねがいであります。どうか、亡くなった者をよいところにお連れくださり、遣された者たちが長寿を全うできますように。幸せにより暮しができますように。子供たちのために、主人は先に行ってしまいましたが、私は長く長く生きていけますようにしてくださいませ」

と何度も両手を擦りながら降神した万神を拜む。

また、その場にいた依頼者の同婿や sinui, その嫁である婦人たちも、順にその子女の年齢をいいながら拜んでいく。

次に、万神は、依頼者を坐らせてその頭上において包丁 (puǒk-k'al, 부엌칼) で空を切り、さらに青竜刀 (ch'ǒngnyongdo, 청룡도) と三枝槍 (samjich'ang, 삼지창) を打ち合せて雑鬼祓いをおこない、北魚を雑鬼に施してその災いを防ぐ。

北魚の頭が外側に向けて投げられた後、万神は、右手に扇 (puch'ae, 부채) を左手に巫鈴 (pangul, 방울) をとって舞い、城隍旗を手にして降神する。再び神託が続く、降神した万神はその最後に、

「よく分った。この精誠を受けとることにする。心配するな」

と神託し、激しい跳舞の後、杖鼓の音が止む。

人々は門の中に入りはじめ、祭場は家の中に移る。このとき、城隍旗は門前にさしておかれる。

2. 不浄巨里 (pujǒng-kōri, 부정거리)

賽神に集まってくる神霊の中には、人々に災禍をおよぼす鬼神も含まれていることから、それらの鬼神を除き祭場を浄化するためにおこなわれる祭次である。

10) これについては拙稿【重松 1980: 107】参照。



写真3 祭場となる大庁に供えられた供物。中央には七星神を招致するための膳が準備されている。

賽神の主な祭場となる大庁においておこなわれ、万神は平服のまま、立巫が杖鼓に合わせて多くの神霊を招致する。別の立巫が依頼者の家族の年齢を唱えながら焼紙 (soji, 소지) をおこなっている。大庁には、行厨退散の際に用いられた本郷膳があげられ、中央に別の膳が設けられている。そしてその上には白米の入った飯鉢 (chubal, 주발) に燭がともされ、水の入った飯鉢が置かれて、万神は七星神 (ch'ilsŏng-sin, 칠성신: 生命をあたえる神とされる) を招致する。また同時に、別の万神は、焼紙した灰を水に浸し、この灰水を入れた匏 (pagaji, 마가지) を持って大庁・内房および霊座の置いてあった越房をまわり祭場を浄化する。

大庁には、万明米 [malmissal, 말미쌀: malmi とは万明 (malmyŏng, 말명: 巫女の霊) のことで、ここでは巫女の霊に供える米をさす] 1斗と大神盤 (taesinban, 태신반: 撒米の占いをおこなう膳を称し、ここではこれに盛るために供える米をさす) 1升の白米、大神餅 (taesin-ttŏk, 태신떡)・山神餅 (sansin-ttŏk, 산신떡)・七星餅 (ch'ilsŏng-ttŏk, 칠성떡)・將軍餅 (changgun-ttŏk, 장군떡) と呼ばれる餅をはじめとする供物がそれぞれの膳に整えられ、祖上膳・成造甌・大監甌も置かれている。

内房には、仏事膳が置かれ、この膳の上に七星神を招致した際の飯鉢がある。白米の入



写真4 焼紙をおこなう万神。

った飯鉢には白絲が置かれ、これは長寿祈願という。また水の入った飯鉢には棗が浮かべられている。

家の各所に置かれた供物のそばに燭がともされ、ここに、神霊や祖上はすべて招致されることとなる。

万神は、これらの神霊や祖上に対して、この賽神が依頼者の精誠によってその亡き夫を極楽天界に送るためになされていることを告げる。そして、依頼者はその子女の年齢を万神に伝え、それが万神によって神霊や祖上に告げられる。このとき、k'ün-chip (큰집: 父母を奉養した長男の家。ここでは依頼者の夫の兄の家をさす) の養子に出た依頼者の長男が、その生家の子女の序列の中で語られ、その長男の子女および養家の姉妹についても続けて告げられた。また、その場にいた依頼者の同婿たちもそれぞれに子女の年齢をいい、万神はその家族や親族の人々を神霊および祖上に告知していく。

その後、万神は杖鼓と鉦鑼により跳舞を続け、この祭礼は靈山 (yöngsan, 영산: 変死した者の霊で不浄な悪霊とされる) に対する施食で終わる。

3. 祖上巨里 (chosang-köri, 조상거리)

万神は、紅天翼 (hongch'öllik, 홍철릭)¹¹⁾ の上に快子を着て朱笠 (pitkkat, 빛갓) をかぶり、右手に花扇を左手に巫鈴を持ち、巫歌を朗唱しながら杖鼓と鉦鑼に合わせで舞う。

次に、万神は祖上軍雄祖父 (chosang-kunung-haraböji, 조상군웅할아버지) に対して、

『ひとりになって、これから (長生きしても) どうする』とおっしゃらないで、7人の子女に対してよくしてください』

と告げる。その応答としての神託が続き、子女の運勢が伝えられていく。

高等学校の入試を控えた末娘のために、その母である依頼者は、

「今月試験を受けます。どうぞ高等学校に入れてくださいませ。私はこの kannani (갓난이: 生まれてまもない赤ん坊。ここでは末娘をさしている) のために、この子のためだけには、その父ともなれますように力をお与えください」

と手を擦りながら拜む。この旨を十二巨星の神霊や祖上に伝えると降神した万神は答える。そして、その他の親族の運勢が次々に伝えられていく。

万神は、杖鼓・鉦鑼・銅鑼 (ching, 징)¹²⁾ により跳舞し、次に五方神将旗 (oban-

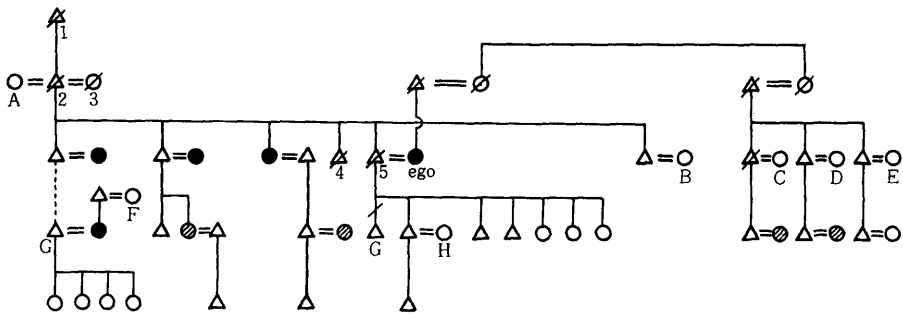
11) 成造神を象徴する紅色の衣裳。成造巨里と軍雄巨里に用いられる。

12) 青銅製で盆状の楽器。ドラ。杖鼓と共に巫楽では普通に用いられるものである。

sinjang-ki, 오방신장기: 五方旗とも称し五方にいる雑鬼を祓うとされる五色の旗)を手にして舞う。その間、依頼者は祖上膳の方を向いてくり返し拝礼(chöl, 절)をおこなう。さらに、万神は、右手に青竜刀を左手に三枝槍を持ち、それらを合せた音によって雑鬼を祓い、大庁から内房に入って同様な所作をくり返す。次に、依頼者の身のまわりを大神刀(taesink'al, 태신칼)で祓い、その大神刀の先がどちらも外に向くまで投げ落とす。外に向けば雑鬼が退散したことを示すという。また包丁を使って同様に祓いがおこなわれる。霊座のあった越房や亡き夫が生前身につけていた衣類も神刀(sinkal, 신칼)と五方旗により祓われる。

次に万神は快子と朱笠を身につけて右手に扇を左手に巫鈴を持って舞い、依頼者は手を擦り合せて拝む。さらに万神は左手に大神刀を右手に麻布をとって掲げ、外に祖上を招致する。一方依頼者は山神膳の方に向かってくり返し拝礼をおこなう。杖鼓・鉞鑼・銅鑼による万神の激しい跳舞が続き、依頼者の祖上たちが次々に降神して来、祖上が降神した万神は依頼者に抱きついて泣く。そして、万神とその場にいた一老婦人によって麻布と白布が引き裂かれ、降神した祖上は立ち去って行くと思われる。

さらに続けて、紙榜(chibang, 지방:ここでは神位の名を書いた紙の位牌をさす)¹³⁾の作られた祖上を呼ぶため、万神は左手に巫鈴を右手に三神扇ならびに亡き者



- ego: 依頼者
- : 神託・準備
- ⊙: 準備のみ
- A: egoと同居
- BH: キリスト教信者(不参加)
- CDEF: 一時的参加(Fのみ洞外からの参加)
- G: 養子
- 番号: 降神した祖上の順序
- 2・3・5: 紙榜の作られた祖上

図2 賽神の準備・神託にかかわった女性たちの関係

13) 位牌とは壇・廟・院・寺などにまつる神位の名を書いた木札をさし、位板とも称す。一般に、祭祀をおこなうごとに神位の名を書いた紙すなわち紙榜を木札にはって位牌とすることが多くみられる。

を象徴する韓服（パジ・チョゴリで男性，チマ・チョゴリで女性を象徴）を持ち，内庭に降りてそれぞれ招致し，大庁において跳舞降神する。

まず，依頼者 ego の siharabōji (시할아버지：夫の祖父) である①が降神して，万神は，

「ああ，大事な孫主が。ああ，子孫たちよ。そんなことがあるだろうか。uri-chiban (우리집안：われら一族)¹⁴⁾ がこのようなことになってしまって。私は何もしてあげられなかったが……ああ，年少の子女をどうすればいいか」

と泣きながら語る。そして，次に②・③の siabōji (시아버지：夫の父)・si-ōmōni (시어머니：夫の母) が降神し，依頼者はその同婿たちに語りかける。また，紙榜は作られていない夭死した依頼者の夫の兄という④が降神した。最後に，激しい跳舞のあと亡くなった夫⑤が降神する。万神は，

「ああ，uri-ōmōni (우리어머니：母。ここでは生きている85歳の継母Aをさす) がかわいそうだ。ああ，かわいそうだ。nechip (네집：自分の家の人たち。ここではAにとっての①・②・③・④・⑤をさす) だとわかって。ああ，かわいそうだ。また，7人の子女を(残して)。ああ，悲しい。……こんなに年少の末子を。……このようなことがあろうか。八字 (p'alija, 팔자：生年月日を干支で表わしたもので一生の運命を決定するとされている) だとはいっても。……こんなに年少のあの子を(残して)……」

と涙を流して泣く。夫が降神している万神は，妻である依頼者や長男の嫁および長男を養子としている依頼者の同婿に語りかけていく。このような時に，降神して来た祖

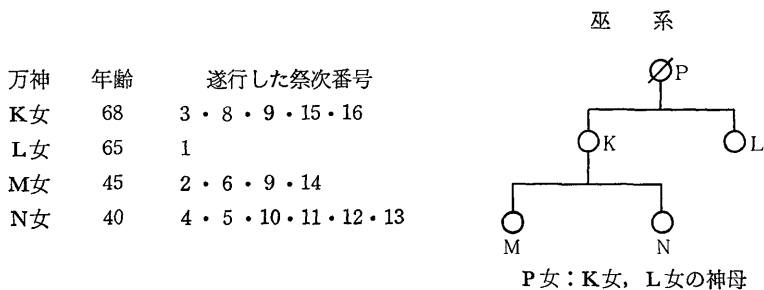


図3 賽神を遂行した万神とその巫系¹⁵⁾

14) uri とは具体的社会関係の存在を示し，chiban は同姓集団をなす家々の成員をさす。

15) 賽神の進行中，L女は体の調子が悪いために主として杖鼓を打ち，K女・M女・N女によって祭次のほとんどがおこなわれた。チノギ賽神として最も重要な祭次である祖上巨里・十王橋は熟巫である大万神K女によっておこなわれ，M女によって不浄巨里・仏事巨里・鉢里公主がおこなわれた。なお，万神の身が不浄である場合，上山巨里・七星巨里・仏事巨里は別の万神が交替しておこなうという。

上への路銀として万神に別費 (pyolbi, 벌비 : 賽錢にあたる) が支払われる。杖鼓・鉞鑼・銅鑼により跳舞し、平服となって靈山に対する施食で終わる。

この後、別の万神が、巫鈴で供えられている万明来をすくい取り、依頼者やその同婿たちの手の平の上に落とし与えてその米粒の数によって占いをおこなった。このとき、奇数は凶、偶数は吉を示すとされており、偶数の場合はその米粒を食べると招福できるとされている。

4. 神将巨里 (sinjang-kori, 신장거리)

万神は、夾袖 (söpsu, 섭수)¹⁶⁾の上に快子を着て、戦笠 (chonnip, 전립) をかぶり、杖鼓・鉞鑼・銅鑼の音と共に、五方神将旗を手にして大庁・内房・越房をまわる。五方とは東西南北および天上の五方を称し、五方神将 (obang-sinjang, 오방신장)¹⁷⁾が五方にいる雑鬼を追放するとされている。五方神将旗によって依頼者の身のまわりが祓われ、次に、依頼者の頭上に亡き夫の衣類をのせて神刀で雑鬼を断ち切る祓いをおこなう。そして、万神は口に含んだ酒あるいは水その衣類にふきかけ、また小豆が投げられる。続けて包丁と牛足によって祓いと施食がおこなわれ、刀先および牛足の先が外側に向くまで何度も内庭に投げ落される。

次に、万神は、神将打令 (sinjang-t'aryöng, 신장타령)¹⁸⁾を唱えながら、五方神将旗を巻いて旗の柄の方をさし出して一本だけ選ばせて占う。紅・白・黄・藍・緑の5色の旗のうち、紅色旗は財数 (chaesu, 재수 : 運勢とくに財運を意味する) がよいことを意味し、白色旗は七星と仏事に精誠をおこなえばよい。黄色旗は祖上に対する供応をしなければならぬことを示し、藍色・緑色旗は心中が安らかでなく死の運数を象徴している。ここでは、依頼者とその同婿や sinui のみがおこなった



写真5 依頼者の頭上に亡き夫の衣類をのせて神刀で祓いをおこなう万神。

16) 紅色の袖のついた黄色の衣裳。別星巨里と神将巨里に用いられる。軍服の一種。

17) 中国の古い五方五帝説を伝承した道家流の神格であり巫神図に描かれた神像も中国服を装っていると記されている [赤松 1938: 97]。

18) 打令 (t'aryöng, 타령) とは囃子詞。ここでは巫歌の一種。

が、財数賽神の際には、見物客を含めてその場にいるすべての人々がこの占いをおこなう。

万神は、牛足と豚頭を持って舞い、依頼者のチマの中に投げ入れ、五方旗を手にして顔ならびに快子と藍帯(nam-tti, 남띠)の間に別費としての紙幣を挟んでくれるように要求する。次に、白米が内房および越房に投げられ、これは招福を意味している。そして五方旗の各旗の間に別費が置かれ、神託がおこなわれる。その後、万神は甑餅を少しずつ内庭に投げて雑鬼に施食し、また、依頼者に酒を飲ませて跳舞で終わる。次に、使臣の霊に対する供応として、豚頭が三枝鎗にさされ、その三枝鎗を立てる祭次がある。塩で三枝鎗のもとが固定され、使臣の霊が受け取った時に立つとされる。

5. 大監巨里 (taegam-kōri, 대감거리)

大庁において、万神は濁酒を飲みながら牛足を手にとり跳舞を続ける。戦笠をとり大監甑を頭上にのせ、花扇を藍帯にさして大庁や内庭の各所をまわる。この間、大庁では杖鼓・鉦鑼・銅鑼が打たれ、もどって来た万神は、依頼者に別費を大監甑の中に入れるように要求する。同様のことが豚頭を頭上に載せておこなわれた。

大監は福とくに財運の神とされ、大監甑と豚頭は依頼者に渡される。これらを受け取ると招福できるとされており、このとき、見物客にも濁酒・肴・甑餅・キムチなどが接待される。

6. 仏事巨里 (pulsā-kori, 불사거리)

万神は、僧帽(kokkal, 고깔: 僧侶や尼僧の山形のかぶりもの)をかぶり、長衫

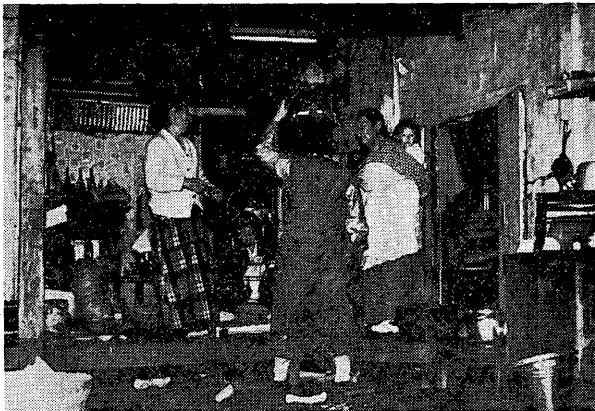


写真6 内庭の各所をまわって大庁にもどって来た万神が頭上の甑の中に別費を入れるように要求している。

(changsam, 장삼)¹⁹⁾の上に左肩から右脇へ袈裟(kasa, 가사)をかけて紅帯(hong-tti, 흥띠)で結び、右手に素扇(so-puch'ae, 소부채: 白扇)を左手に巫鈴を持つ。杖鼓を打つ坐巫と仏事巨理主受け(pulsa-kōri-jubaji, 불사거리주받이: 立巫の朗唱したことを坐巫がくり返し朗唱していく巫歌の一つ)がくり返され、続いて仏事讚歌(pulsa-norae-garak, 불사노랫가락: norae-garak とは巫歌の一つ)が朗唱される。

また、先に万神が内房で拝礼をおこない、仏事膳は大庁に出されているが、万神は依頼者とその仏事膳の前に坐らせ、鉦(kkwaenggwari, 쟁과리)を打ちながら七星経(ch'il-songgyong, 칠성경)を口に出していく。

唱経がしばらく続いた後、饑水(chōnsu, 전수: 雑鬼を追いはらうために水滴をまく巫儀)がおこなわれ、万神は紅色旗と白色旗を手にとって舞いながら大庁および内房をまわる。

次に、仏事膳に供えられていた白米1鉢・白絲1より・蠟燭を順に右手にとり、素扇を左手にして舞う。その後、神刀を口にはさんで、それはずし、白雪餅の入った



写真7 杖鼓を打つ坐巫と pulsa-kori-jubaji を唱じる万神。

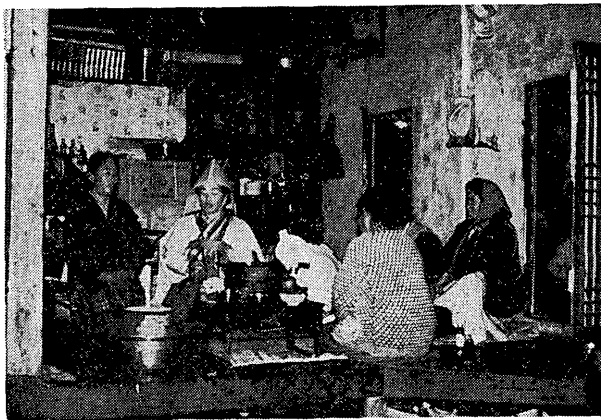


写真8 kkwaenggwari を打ちながら唱経を続ける万神。

19) 帝釈神を象徴する白色の衣裳。帝釈巨里・仏事巨里・七星巨里に用いられる。

かなり重い仏事甌を口で支えたまま静かに舞う。仏事甌が支えられた瞬間、仏事神 [pulsá-sin, 불사신: 命福をあたえるときれ、帝釈 (chesök, 제석) とも称される] がそれを受け取ったと見做される。口で支えられた仏事甌をはずす際になかなかとれないため、焼紙がおこなわれた。この仏事甌が口で支えられはずされる間、依頼者をはじめ人々は手を擦りながら、その甌の中に別費を入れて拝む。仏事甌がはずれた後、万神は鉞鑼を打ちながら舞い続ける。

ここで、依頼者の k'un-myönnuri (큰며누리: 長男の妻を称す。この場合は依頼者の夫の兄の家に養子に出た長男の妻をさす) には男子がないため、依頼者とその同婿 (夫の兄の妻をさす) および査頓 (sádon, 사돈: 婚家間の両親親族相互の呼称。ここでは k'un-myönnuri の実母をさす) の3人の母も加わって産子祈願がなされた。これに答えて、亡き者を極楽に送り男子出産の願いをかなえるという神託が下される。

次に、帝釈扇・帝釈僧帽・修羅篋が焼紙され、万神が依頼者とその同婿の手の平に米粒を落としあたえて、その数によって前述のとおり占う。また、万神は鉞鑼をとり鉞鑼打令 (bara-t'aryöng, 바라타령) を朗唱し、依頼者の家族や親族の各者についても鉞鑼を打ちながら神託をおこなう。

そして、万神は平服となり雑鬼に施食し、この祭次は終わる。

7. 舞監 (mugam, 무감)

まず依頼者が、僧帽をかぶり長衫や袈裟などの巫服を身につけて万神たちによる巫楽に合わせて舞った。次に、依頼者の同婿たちと sinui および嫁がそれぞれに巫服を借りて舞いを続けた。

「舞監をやりなさいよ。」と勧められて舞うと福があるとされ、飲酒歌舞しながら神人同楽の場となる。『賽神がやりたくても嫁が踊るのを見るのがいやでやれぬ』という諺がある程で、財数賽神などの場合には、その場にいるすべての人が舞監を舞うことになる。ここでは、チノギ賽神であるためか、見物客のうち舞監をおこなう者は少なかった。

8. 上山巨里 (sangsán-köri, 상산거리)

万神は、汗衫 (hansám, 한삼)²⁰⁾をつけて夾袖を着、その上に快子と藍天翼 (nam-ch'ölik, 남철익)²¹⁾を重ねて紅帯で結び、朱笠をつける。五方神将旗を持って舞い、

20) 手をかくすために両袖に付け加えた長い別袖。白色や saetton (색동: 五色の縞紋様) のものがある。

21) 白汗衫のついた藍色の衣裳。戦服の一種で崔宝將軍を象徴。上山巨里に用いる。



写真9 上山巨里で神霊を招致する万神。左は山神膳を拝む依頼者。

神刀を口につけてすぐにはずし、両手に持って舞い続ける。次に、神刀を口にはさんで依頼者にそれをはずさせる。大神刀をとり依頼者の身のまわりの雑鬼を祓い、霊座の置かれていた越房に入って行き、大庁に設けられた山神膳の前で舞う。

膳の上には、甑餅・三色果実・肉散炙 (kogisanjök, 고기산적)・白米1鉢・蠟燭3本・豚頭・牛足・大豆・小豆・水1鉢・酒3杯があり、山甑 (san-siru, 산시루) と呼ばれる甑がそばに置かれている。その甑の中には甑餅があり、その上に白米1鉢・白絲1より・蠟燭2本が置かれている。

杖鼓に合わせて、上山巫歌 (sangsán-noraegarak, 상산노랫가락) が唱えられ、比較的緩慢な動きの舞いが続く。そして鉞鑼の激しい音と共に跳舞降神し、

「ああ、背信をしておきながら（先に洞内でおこなわれた財数賽神の際に神託を受けておりながら、夫がおこなおうといていたにもかかわらず賽神をおこなわなかったことをさす）。ここには紺岳山 (kambaksan, 감박산)²²⁾の十二神もおられる。背信を致しましたが、この精誠をおこなうというか。7人の子女をさすけ、ここまで成長させてきたのに。祖上に対してどう申しあげるつもりか。昌慶苑²³⁾。

22) 三国史記雜志祭祀条に小祀の1つとして「紺岳」と漢字表記され、『高麗史』および『輿地勝覽』等には「紺岳」「紺嶽」として表記された名山である。標高675メートルで、山頂に「櫛石大王 (pitto-taewang, 빗돌대왕)」と呼ばれる約3メートルの碑があり、そこに子息を祈願すれば霊験あらたかであると称されて楊州・抱州・高陽・積城・坡州・交河・漣川等の地で人々に信仰され、開城の松嶽祠や穗勿山の崔瑩祠と共に神山とされる。山頂から50余メートル下に泉 (saem, 샘) があり「泉水堂 (umultang, 우물당)」と称して、山致誠 (san ch'isong, 산치성 : 致誠とは真心をつくして祈願することを意味し、山でおこなわれる巫儀の一つ) をおこなう巫女たちは賽神のほとんどをそこでおこない、帝釈巨里のみ山頂でおこなうという。この山は臨津江 (imjingang, 임진강) を北に臨み現在一般人の入山は禁止されているが、1967年1月頃まではこの山で致誠がおこなわれ「櫛石大王」もそのままであったことが記されている [張・崔 1967: 19-20]。

23) ソウル鐘路区にある昌慶宮の内庭。1907年李朝純宗が昌徳宮へ移るまで王宮であった。

昌徳宮²⁴・景福宮²⁵)でうわさされ、景福宮に出入りしている *chegalkongmyǒng-*先生將軍様(제갈공명선생장군님:神靈の名)²⁶)とは私だ。濟州島漢拏山の女將軍様とは違う。……今回のようなことなく無事に子女が生きていけるようにしてください、嫁の願いもきいてくださるという。……3人の男子は、陰曆11月・12月(*tong-jisǒttal*, 동지섣달)を残し来年3月・4月には財数がよくなり……」

というように、次々に家族や親族の運勢を神託していく。

また、右手に青竜刀、左手に三枝鎗を持って杖鼓と鉞鑼により跳舞する。紺岳山の北に在すという靈大主汝山神祖母(*yǒngdaeju-munsansin-halmǒni*, 영대주문산신할머니:神靈の名。大主とは巫が得意先の男主人をさす場合に用いられる語)が臨津江を渡って来たと降神し、万神は神託の後、五方神將旗をとって杖鼓に合わせて歌舞し、本郷大監・上山大監・將軍大監・神將大監・祖上大監・七星大監・樹林大監が次々に降神したとされて次のような神託で終わる。

「……私がこのように *ajumǒni* (아주머니:ここでは依頼者をさし、万神が依頼者を高めて親しみをこめて呼んでいる)の家をみまわしたところ、一晩だけ心を尽してもてなただけで、いいことがありますよ。神々のほほえみが感じられますよ。」これに対して依頼者は、

「そのようをお願い致します。私は、ただ子女によくしていただければ。それだけが願いでございます。」

と拝む。

この祭次の途中で、見物客はほとんど帰り、午前1時すぎに神託が終わり、引き続き次の祭次へと移っていく。

9. 成造巨里 (*sǒngju-kǒri*, 성주거리)

万神は汗衫をつけた夾袖の上に紅天翼を着て、朱笠をかぶり、杖鼓の音に合わせて成造巫歌(*sǒngju-noraegarak*, 성주노랫가락)を朗唱する。次に、成造が降りてくるとされている松の枝を手にとって舞いながら降神し、内房に入って松の枝で被いをおこない、依頼者の身のまわりも同様に被われる。また、右手に花扇を左手に巫鈴を持って舞い続け、降神する。

大庁には膳の上に成造甑・牛足・豚頭があり、そのそばに成造枅(*sǒngju-maryǒng*,

24) ソウル苑西洞にあり李朝歴代の王が執政常住したところ。

25) ソウル北岳山の南麓にある李朝の宮殿であったところ。

26) 李朝時代宮中でおこなわれた賽神にも出かけたことのある神靈と称しているが、そのような神靈が降神する万神は国巫女の巫系に属する者で、万神としての身分が高いことを示す。



写真10 松の枝を手にして舞いながら降神している万神。

성주마령)・taebaji (대밭이: taebaji とは前任者のあとを引き継ぐことを意味する。人が亡くなるとその家の成造は去るとされているが、新しく迎える成造が引き継ぐということからこのように称されるものとおもわれる)と呼ばれる白米が置かれている。万神は、この白米を手にとり銅鑪の上で占う。この場合は、その撒かれた状態により占われる。そして、濁酒を依頼者に飲ませる。その後、豚頭が三枝鎗により支えられ、支えられた瞬間、成造に受けとられたとされる。

次に、万神は、円衫 (wonsam, 원삼)²⁷⁾を着て、右手に花扇を左手に巫鈴を持って降神し、さらに成造甌の中にあつた北魚を左手にとって舞いながら降神する。北魚は頭の方が外側に向くまで内庭に投げ落される。

他方、別の立巫によって焼紙がおこなわれており、家族の福を祈願している。

さらに、万神は白米・豆腐・sujö (수저: 匙と箸) の入った匏を持って舞い、米を匙で大庁・内房・越房に撒く。匙が投げられてすべて上向きに落ちるとよいとされ、成造によく受取られたとされる。万神は匏を頭上に載せて舞い、依頼者が福として受け納屋に置く。

また、万神は再び巫鈴を手にして舞い続け、神刀を持って打ち合せながら内房および越房を術い、神刀の先が外側に向くまで投げ落される。これは雑鬼を術っているのであるが、青竜刀と三枝鎗によっても同様のことがくり返されてこの祭次が終わる。

10. 基大監乞粒 (t'ödaegam-köllip, 터대감걸립)

万神は快子を身につけ、甌餅を内庭の各所に供え、白米1鉢を井戸のそばに供えて

27) 婦女の礼服の一種。五色汗衫のついた緑色の衣裳。倡夫巨里 (ch'angbu-kori, 창부거리) および胡鬼巨里 (hogu-kori, 호구거리) に用いられる。

豚頭と牛足を持って舞う。大監甌を頭上に載せ大監打令 (taegam-t'aryong, 대감타령) を朗唱し、甌を載せたまま各所をまわり歌舞する。北魚と花扇を手にして舞い、井戸のそばにあった水を依頼者に与える。内庭が主な祭場となり、万神が各所をまわっている間、大庁においては継続して杖鼓と銅鑼が打たれる。

この祭次を終えた午前3時すぎ一同就寝し、夜が明ける7時頃まで中休みとなる。

翌朝、万神は大庁にある祭壇をかたづけ始め、万神たちの中で供物や米がそれぞれ分けられる。また、新たに靈山膳 (yöngsan-sang, 영산상)・使者膳 (saja-sang)・祖上膳が整えられ、外庭に運ばれる。大庁において雑鬼に施食した後、次の祭次が始められることとなる。

11. 軍雄巨里 (kunung-kori, 구녕거리)

飯餅3皿・三色果実・北魚2尾・白米2鉢・お菜物・酒1杯が供えられた膳が大庁に用意され、軍雄に供応される。このとき、万神は快子を着て朱笠をつけ、花扇を右手に持っている。他方、別の立巫によって焼紙がおこなわれており、祭場は門の外すなわち外庭に移っていくこととなる。

外庭には、靈山膳・使者膳・祖上膳・kasimun (가시문: いばらの門。人は死ぬとすべてここに落ちるとされている) などがすでに準備されている。万神は、杖鼓・鉦鑼・銅鑼の音と共に花扇を持って舞い、豚頭と牛足の入った甌を頭上に載せて外庭をまわり、各所に濁酒をまき打令を朗唱する。

12. 城隍巨里 (sönnang-köri, 서낭거리)

城隍とは村を守護する城隍神の宿る老木を称し、この祭次は神霊の往来を容易にして送神するためにおこなうという。

万神は、最初の祭次行厨退散の際、門前にさしておかれた城隍旗を持って舞い、北魚を手にして外庭をまわりながら姿を消してしまう。ここで、ほとんどの神霊は送り出されたことになる。

13. 使者娛遊 (saja-nori, 사자놀이)

前祭次城隍巨里において見えなくなった万神は、頭に巾 (kön, 겹: 喪中の男子がかぶる頭巾) を象徴する麻布を巻き、亡者 (mangja, 망자) が降りてくる北魚を背負って、再び登場する。

杖鼓・鉦鑼・銅鑼の音と共に、まず、changnim (장님: 盲人の敬称) と呼ばれる盲瞽の霊が降りて来て靈山膳の前に立つ。

霊山膳の上には、甑餅 3 皿・白雪餅 1 皿・三色果実・白飯 2 鉢・脯 (p'o, ㅍ)・汁 (t'ang, 탕)・酒 1 杯が供えられ、豚頭と牛足の入った甕がそばに置いてある。

万神は盲颯となり、膳の上に手をやりながら、

「これはなにか。ああ、腹がへった。これは食べものか。酒はないか。……」
と尋ねるのに対し、依頼者やその同婿あるいは sinui たちが、

「はい、それはりんごでございます。どうぞ召しあがって、今後災いのないよう
になさってください。」

と答えると、

「そのようにしてやるには、供物が少ない。米を持って来い。」

というように演劇的な場面が続く。やがて、盲颯の霊が満足すると杖鼓・鈸・銅鑼の音と共に去って行く。

万神は、続けて跳舞し、次に使者 (saja, 사자) が降りてくる。使者は、亡き者が極楽天界に向かう際、その邪魔をする鬼神とされており、この使者によく供応しなければ地獄 (chiok, 지옥) に連れて行かれるという。

前述した盲颯の霊と同様に、使者膳の上に供えられている甑餅・三色果実・白飯 4 鉢・白飯 3 皿・お菜物・酒 3 杯のすべてに手をつけて食べ、縄をふりまわして祖上膳の上の供物を取ろうと近づく。祖上膳のまわりには、依頼者やその同婿および sinui たちがそれを取り囲むようにして立ち、使者を防ぐ。魂篋を使者にとられると亡き者が地獄に連れていかれるとされているので、それもとって囲んでいる。このとき、縄のあみ目のところに別費が挟まれ²⁸⁾、冥土への道中邪魔をしないようにと願われる。演劇



写真11 祖上膳。手前の櫛の木の魂竿に魂篋がみえる。

28) 挽歌を唱いながら死者の埋葬をする洞内の人の労をねぎらう際にも、挽歌を歌う人が持つ縄にお金をはさむことがなされる。

的でありながらもやや緊張した雰囲気の中に、使者が満足して立ち去ることになる。

そして、万神によって son (손:人間の活動をさまたげる魔物²⁹⁾) のいるところに使者膳の供物が捨てられ、この祭次は終わる。

14. 鉢里公主 (parigongju, 바리공주)

万神は、頭に簗頭里 (cchokturi, 쪽두리:儀式の際に用いられる婦人用冠の一つ) をつけ、五色汗彩のついた蒙頭里 (mongduri, 몽두리³⁰⁾) を着て、右手に扇・左手に巫鈴を持って杖鼓・鉞鑼・銅鑼により降神し、神託をおこなう。

次に、万神は、万明米 (白米) の満たされた杓の上に巫して杖鼓を縦に立てて置き、左手に巫鈴を右手に布製の杖鼓棒 (changgu-ch'ae, 장구채:杖鼓をたたく棒) を持ち、杖鼓の上面を静かに打ちながら鉢里公主 (捨姫) 巫歌を朗唱する。人々は別費として鉢里公主錢 (parigongju-don, 바리공주돈) を杖鼓紐 (changgu-jul, 장구줄) の間に挟む。

杖鼓の前には膳が設けられ、膳の上に白米が盛られてその上に魂紙 (nokjongi, 넉종이:占いに用いられる白紙) が置かれている。また、水1鉢および白米を満たした鉢に蠟燭1本と線香1鉢をさしたものが供えられている。その膳のそばに米の入ったたらいが置かれ、魂箋 (nōkjōn, 넉전:魂の宿るところとされる) と呼ばれる白紙を結びつけた櫟の木の魂竿 (ch'angnamu-nōktae, 창나무넉대) がさされている。そのさ



写真12 鉢里公主 (捨姫) 巫歌を続ける万神。

29) 1・2の日は東, 3・4の日は南, 5・6の日は西, 7・8の日は北にあり9・10の日には無いとされている。

30) 舞衣の一種。黄色の衣裳で祖上の中に巫女を出した家の者によって献納されるもの。祖上巨里およびチノギ賽神で用いられる。

らに前方に白米と大豆の入ったいばらの門すなわち kasimun が置いてある。すべての死者がこの kasimun に落ちるとされており、また鉢里公主が捨てられたところでもある。鉢里公主のように、亡くなった者がこの kasimun から出ればよいところに行けるとされている。そのため、亡き者の遺族たちはそこに別費として kasimun 錢 (가시문돈) を置く。また、依頼者は膳に仏前錢 (puljŏn-don, 불전돈) を置き拝礼する。ここで、鉢里公主錢は捨姫巫歌に出てくる子息七兄弟 (adŭlch'ilhyŏngje, 아들칠형제) が受け取り、武將息 (mujsangsik, 무장식) は隅木の下で kasimun 錢を受け取り、物乞いをする祖母 (pirŏk-halmŏni, 비력할머니) や祖父 (pirŏk-harabŏji, 비력할아버지) は仏前錢を受け取って亡き魂身を極楽へ送るとされている。その場にいる見物の人たちも、捨姫巫歌に聴き入り涙を流す。捨姫巫歌は2時間程続けられる。

巫歌が終わると、膳の上の魂紙が焼やされ、米の焦げ方によって亡くなった夫はあの世で鳥になると占われた。この占いを魂盤 (nŏkppan, 닢반) と称し、その焦げ方によって生まれかわった姿が現われるという。鳥が最もよいとされ、いつかこの世に生まれてくることを意味する。次は蝶で、未婚のまま亡くなった場合は蝶になればよいとされており、続けて人そして蛇に生まれかわるにしたがって悪いとされる。

次に、万神は、鉢里公主の装いのまま右手に花扇を左手に巫鈴を手にし、依頼者の夫の魂を招致し、その万神を先頭に、依頼者は燭を、その同婿や sinui 等は紙榜あるいは亡き夫の衣類や甌餅を持って、「南無阿弥陀仏」を唱えながら祖上膳のまわりを左まわりに3回まわる。さらに、万神は祖上膳の上を東から西、北から南、西から東、南から北へと依頼者およびその同婿や sinui 等4人のチマの中に神刀を投げて落とし入れていき、これを3回くり返した。最後に、その神刀が外側に向けて投げ落され、万神は魂竿を持って舞い、ここで、依頼者の夫の魂は鉢里公主に導かれて魂箋に宿る。

15. 十王橋 (siwangdari, 시왕다리)

万神は蒙頭里を着て、魂箋を首につけている。鉞鑼を打ちながら、仏事橋・十王橋と呼ばれる白布と麻布を万神が胸部で切り裂いていく巫儀が続く。このとき、麻布の上には麦と塩が撒かれ、また人情 (injŏng, 인정) といって路銀としての賽銭が置かれ、万神により次々に麻布・白布が切り裂かれていく。

依頼者によって用意された祖上と亡き夫のための韓服 (パヂ・チマ・チョゴリ) がそれぞれ万神の手に取られると、そのたびに祖上が降りて、見物の人たちも涙を流す中、依頼者やその同婿および sinui 等は次々に祖上との別れをおこなう。最後に、パヂ・チョゴリを身につけた万神に依頼者の亡き夫が降り、涙して、



写真13 続けて4人の婦人たちが両端をささげた仏事橋の下を、万神は鉞鑼を打ちながらくぐって一往復し、裂いていく。

「ああ、行きたくない。……」

と十王橋を前にして泣きくずれる。依頼者は、

「いいところに行って、私たちをあの世からまもってください。」

と涙ながらに語る。そして、すべての十王橋・仏事橋が裂かれた後、祖上膳の前では、依頼者やその同婚および siuni たちによって儒教式の祭祀がおこなわれる。

この祭祀で使われた麻布・白布・パジ・チマ・チョゴリ・紙榜・魂箋などのすべてが万神によって燃やされる。

16. 後 餞 (twitcchön, 뒷전)

杖鼓が速い拍子となり、万神は平服となって、すべての供物を少しずつ匏にとり、雑鬼に供応を受けたら早く退散するようにと唱えながら匏の中の供物を施食する。そして包丁が外側に向くまで投げ落されて雑鬼が退散したことが示されるとこの祭次は終わる。

別の万神によって、賽神で使われた松の枝や櫟の枝, kasimun に用いられた朝鮮躑躅 (chindallae-namu, 진달래나무) の枝などのすべてが燃え尽きるまで燃やされる。ここに、賽神は成就される。

Ⅲ. お わ り に

一般に、巫覡は社会的に蔑まれた存在とされてきたことが知られている。

降神巫³¹⁾である万神は、mich'in-saram (미친사람: mich'in とは気が狂った、精神に異状をきたしたという意味であり、saram とは人をさす)と言われるように社会的には異質な領域に属する人として捉えられ、mich'in-changsa (미친장사: changsa とは商売を意味し、ここでは巫業をさす)を望まず他の職業に就こうとしても神霊の怒りをかうことになり病氣・失財・失敗などを重ねてうまくいかないとされている。したがって、万神は、賽神の際にのみ、祖上および神霊と人々との仲介をおこなういわゆる「万神」としての扱いを受けてきたといえよう。

このことは、賽神の非日常性すなわち異質性を示しており、文化・社会的にも賽神が異質な領域においておこなわれることを認識させる。

万神は飲酒歌舞することによって降神するが、その降神形態には、

- 1) 万神が神霊あるいは祖上となり一人称で語る場合
- 2) 万神が人間と神霊あるいは祖上との仲介者として語る場合
- 3) 万神が巫ではない第3者に死霊を降神させる場合

がある。この3)は、charigöji やチノギ賽神などでしばしば見られ、万神が魂竿を手にした第3者に向かって問いかけるとそれに降神した死霊の応答として魂竿が動く形態である。巫ではない見物客のひとりを選んで死霊を降神させることは、賽神という非日常的領域において、他の神霊に比べて心理的に距離感のない死霊との関係を調整させるために、日常なるものによって非日常性すなわち異質性をより顕著に示し、異質な領域としての賽神を顕在化させることになる。

万神の役割とは、社会生活の中で生じた非日常的問題に当面している依頼者の精神的・心理的異常を、賽神という社会的に異質とされている領域において解消させることといえよう。

この事例から、夫を失った依頼者の情緒不安定な状態は、賽神における諸々の相互関係、とくに彼女をとりまく社会関係の中で、幾分か解消されたといえそうである。

賽神の特徴として神霊の招致・娛神・解きがくり返されることは前述したが、水で浄め、火で浄め、刀で祓うというように除災もくり返しおこなわれる。また、諸神霊に供物が供応されると共に雑鬼雑神への施食がくり返しおこなわれる。万神は神霊や祖上の降りてくる器であり、巫服はよりしろとみることもできよう。

日常生活において、匏は常に清浄なものとして用いられるが、器から器に移す匏のように移すものの中に清浄が認識されているようにおもわれる。したがって、常に清浄な器というものはなく、清浄と不浄は共にある。流れる水で洗い流すのではなく、

31) 巫覡は入巫形態により降神巫と習得巫に大別される。

溜めた水を匏でくり返して何度もすすいで洗うように、しだいに浄化されていくといえよう。

賽神においても祭次をくり返すことによって除災招福が可能であるとされているのではなかろうか。神霊および祖上は災禍をおよぼすこともあり福をもたらすこともある。賽神という祭次のくり返しが生じ、しだいに災禍をおよぼすものを祓い退散させながら福をもたらしていくものとおもわれる。

死霊祭であるチノギ賽神の場合にも、死という災いを祓い招福を祈願しておこなわれている。この事例において、夫の死は神託があったにもかかわらず依頼者が賽神をおこなわなかったことによるのであり、精誠を尽すことで除災招福の約束がなされたのである。

つまり、ここで神霊との新たな関係が結ばれたと同時に、依頼者をとりまわす祖上および生者の社会関係も新たなものとなり、とくに生者の場合、賽神は新しい関係を相互に認識する機会として捉え得ることを指摘できよう。

謝 辞

本稿を記述するにあたり、巫案に関しては国立音楽大学内田り子教授にご助言をいただいた。また、本館の伊藤幹治教授、吉田集而助教授には、草稿を閲読のうえ、ご助言をいただいた。記して、深謝の意を表したい。

文 献

- 赤松智城・秋葉 隆
1938 『朝鮮巫俗の研究』下 大阪屋號書店。
- 張 籌 根・崔 吉 城
1967 『京畿道地域巫俗』（楊州郡巫女趙英子篇）文化公報部文化財管理局。
- 崔 吉 城
1967 「韓国巫俗の研究」『韓国民俗学』（3）：6-29。
- 泉 靖一
1967 「巫党来歴考」『東洋文化』（46）・（47）：55-74。
- 金 泰 坤
1966 『黄泉巫歌研究』創又社。
- 蘭 谷
1885（推定）『巫党来歴』。
- 重松真由美
1980 「賽神にみられる女性の社会関係——韓国京畿道楊州郡における巫俗の一考察——」『民族学研究』45（2）：93-110。
- 柳 東植
1971 『朝鮮シャーマニズムの歴史・構造的特質』国学院大学博士学位論文。